学校体育施設付近に住む住民の不満の内容について

荒 井 康 夫

The Complaints of People Living Near Athletic Facilities of Schools

YASUO ARAI

ABSTRACT

A report from the Physical Education Bureau of the Ministry of Education indicated that there were 141,794 schools with athletic facilities throughout the nation. The number corresponds to 64.8% of the toral athletic facilities in Japan. The purpose of the present study is to summarize some complainingesses of the residents who live near the facilites in order to consider better administration of school physical education, sports activities. None has been done in this regards.

Subjects for the study:

1) Five elementary and 5 junior high schools.
2) Fifteen high schools(5 boys, 5 girls, and 5 coeds)
3) Four universities.

Time for the study: Oct., 1977.

Methods for the study: Questionair and observation.

Items of the questionair:

1) Any complainingness due to residing near school.
2) Any complainingness for athletic facilities and activities.

The number asked to respond: 610(21 per one school)

The number obtained: 257(42%)

Sex and age of the residents who responded:

Male: 43%, and average age is 47 years old.

Female: 57%, and average age is 41 years old.

An average of 49% of the residents indicated some complainingness on the athletic facilites and athletic activities. The detail was 45% for elementary, 42% for junior high, 60% for high schools, and 48% for universities. Among the replies of the 60% for high schools, braking the window by balls such as baseball, soccer, tennis etc. and loud voices caused by athletes were ranked highly. In addition, they wanted to use the facilities on holidays.

The most complainingness occured during 3:30PM and 7:30PM. Furthermore the complainingness was centered between July and October.

In summary, the following problems should be discussed to solve the complainingness delivered from the residents who live near schools ;

1) moral sense of athletes and coaches
2) communication between school administrator and residents
3) administration system of school

緒　　言

我が国の昭和55年度における体育・スポーツ施設は，総数で218,631か所である．設置者別にすると，学校体育（教育活動）のために設置された体育施設は141,794か所で全体の64.8％を占めている．また，公共スポーツ施設が29,566か所で（全体の13.5％），次いで職場スポーツ施設が29,013か所で（13.3％），民間非営利スポーツ施設が5,592か所（2.6％），民間営利（商業）スポーツ施設は12,666（5.8％）という現状である．

スポーツは生活環境の変化から生ずる健康の阻害要因を取り除き，健全な国民生活を確保するのに不可欠なものと考える．だが，現状は学校体育施設が全体の64.8％を占めているにもかかわらず，学校体育施設付近に住む住民の意識調査に関する研究報告は見つからない．そこで，今回は学校体育（教育活動）の参考とするために不満の内容に関する意識調査を行った．

調　査　方　法

対象校：名古屋市内．小学校5校，中学校5校，高等学校15校（男子校5校・女子校5校，男女校5校），大学4校，合計29校．

調査期日：1977年10月．

調査方法：質問紙調査法と観察．

調査内容：イ．学校が近いということで不満に感じたことの有・無．
ロ．体育施設，体育活動関係での不満に感じたことの有・無
ハ．ロにおける，時期に関する項目．
ニ．体育施設，体育活動で感じていることに関する項目．
ホ．体育活動，体育指導者に対する項目．
ヘ．その他．

イ～ヘの内容を同一用紙に一括し，1軒ずつ訪問して依頼した．その後調査紙を返送してもらった．

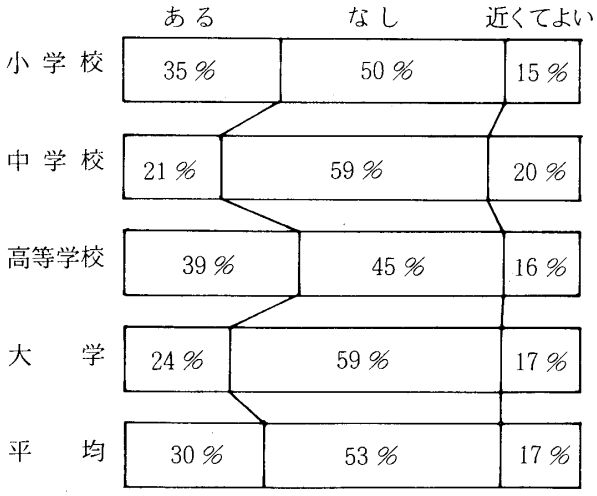
調査軒数：610軒，1校に対する平均は21軒．

結果と考察

回収軒数257軒，42％．回答者全体の43％は男子で平均年齢47歳，47％は女子で平均年齢41歳であった．

学校が近いということで不満に感じたことがありますか（体育施設，体育活動関係はのぞく），に関する質問の回

表1　学校が近いということで不満に感じている学校別割合



答は表１に示した．

小学校35％，中学校21％，高等学校39％，大学24％，平均30％の住民が学校が近いというだけで不満に感じていた．

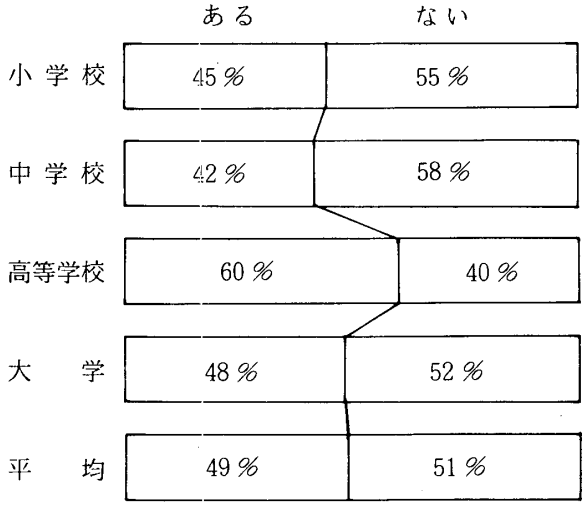
各小学校，中学校，高等学校，大学における不満の概要について．

小学校については，児童生徒の登校，下校時に集中し，チャイムのいたずら，玄関前に自転車を置いていく，石を投げるなどであった．

中学校については，小学校，高等学校に比べると21％と低くなっており，内容についても，登校，下校時に多少騒がしくなる程度であった．

高等学校については，39％で学校別の比較をするとトップであった．内容については，バス停での割り込み，傘などの盗難（調査紙により推察すると，生徒によるものであるかは明確ではない），授業をさぼっている生徒を見かける，などといった素行面による内容であった．

表２　体育施設，体育活動での不満に関する学校別割合



大学の場合については，学生の分際で自動車通学するなどもってのほか，しかも玄関前によく駐車している，といったものが主であった．

学校が近くてよいと答えた学校別割合については，小学校15％，中学校20％，高等学校16％，大学17％，平均17％，概要については，通学に便利である，交通事故の心配をしなくてよい，商売柄（文房具店など），子どもが好きだから，といったものであった．

体育施設，体育活動関係での不満を感じたことがありますか，に対する質問の回答は表２に示した．

小学校45％，中学校42％，高等学校60％，大学48％，平均49％と学校体育施設付近に住む住民は体育施設，体育活動関係での不満を感じているという結果であった．それら学校別における内容と割合については表３に示した．

小学校は１番目に，体育施設を休日だけでも自由に利用できないだろうかと願っているものが35％．２番目の運動会の練習に対する不満が25％，運動会の季節になるとマイクロホンの音，児童の声などで騒がしくなる．３番目に休暇時の指導ということで20％．これは，夏休みに児童のために水泳を主とする実技指導をしてほしいということである．４番目のボール関係９％は，野球，ソフトボール，バレーボール，サッカーボールなどがよく飛び込んでくる．５番目のその他11％は，グラウンドの砂ぼこり，排水，ごみなどの不満である．

表３　学校別不満の内容と割合

小学校			中学校			高等学校			大学		
1	休日の使用	35％	1	ボール関係	30％	1	ボール関係	49％	1	指導してほしい	25％
2	運動会の練習	25％	2	休日の使用	24％	2	掛け声	18％	2	ボール関係	20％
3	休暇時の指導	20％	3	運動会の練習	15％	3	休日の使用	15％	3	休日の使用	18％
4	ボール関係	9％	4	掛け声	15％	4	清掃	9％	4	掛け声	14％
5	その他	11％	5	先生の言葉使い	11％	5	指導してほしい	5％	5	清掃	12％
			6	その他	5％	6	その他	4％	6	その他	11％

中学校は１番目にボール関係30％．２番目に休日の使用24％．３番目に運動会の練習時に騒がしくなる15％．同位番目，掛け声15％，この内容については，クラブ活動中におけるボイスがうるさいというものである．５番目に先生の言葉使い11％とあるのは，発育盛りの子どものこと．先生もつい懸命になり言葉使いが乱暴になるのか…….

高等学校，１番目はボール関係で49％とかなりの不満を感じていた．内容については，硬式野球のボールでガラスを割る，屋根の瓦を割り雨漏りがする，洗濯物を汚す，植木を荒らす，しかも，何のあいさつもなく，まったく知らんふりといった不満が多かった．２番目に掛け声の18％．３番目に休日の使用15％．４番目に清掃９％．グラウンドの周辺にパンの袋・空カン・空ビンが散乱している．５番目の指導してほしい５％．この内容は，各クラブ活動を指導している先生に日曜日だけでも住民に指導してほしいということである．高等学校における各運動種目の指導者は専門的な技術・知識をもっているから，といった考え方である．

大学は１番目に指導してほしい25％，主にテニス，バレーボール，水泳など，高等学校の指導してほしい５％のものとは多少内容に違いがあり，大学の場合はレクリエーション的な活動である．２番目にはやはりボール関係20％．３番目に休日の使用18％．４番目に掛け声14％．５番目に清掃12％という学校別の結果である．中でもボール関係の不満が小学校９％，中学校30％，高等学校49％，大学20％，平均27％を占めていたわけであるが，現在のフェンスの高さを100cm 程高くしてくれたらという住民の意見があった．

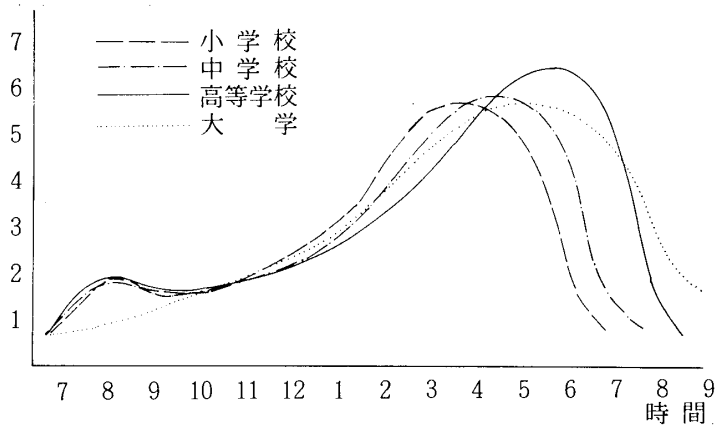


図１　学校別不満に感じている時間帯と度合

次に学校別の不満に感じている時間帯と度合を図１に示した．小学校については，14時頃から17時頃にかけて，中学校については，15時頃から18時頃にかけて，高等学校については15時30分頃から19時頃にかけて多く見られる．大学になると，15時頃から20時頃にかけて，長い時間不満に感じているようであった．これらの時間帯はクラブ活動中のものであることは明らかである．また小学校，中学校，高等学校とも７時30分頃から８時30分頃にかけて上向きになっているが，朝礼の時のマイクロホンの音，朝の体操，クラブ活動によるものである．

年間通じて何月頃に多く不満を感じているかについては，５月下旬から11月上旬にみられ，特に７月，８月，９月に多くみられた．

表４　不満を伝えた学校別割合

	伝えた	伝えない	伝えたいと思う
小学校	52 ％	30 ％	18 ％
中学校	58 ％	25 ％	16 ％
高等学校	24 ％	45 ％	30 ％
大　学	24 ％	43 ％	33 ％
平　均	40 ％	36 ％	24 ％

表４においては，体育活動，体育施設に関する不満などを学校に伝えましたか，という質問の回答を学校別割合で示した．小学校52％，中学校58％，高等学校24％，大学24％，平均40％であった．体育施設，体育活動関係での不満は小・中学校に比べると，高等学校の場合の不満が約15％増となっているにもかかわらず，学校に伝えた％は非常に少なかった．これについて

は，小学校・中学校の場合，学校付近に児童・生徒が生活し，家庭と学校のつながりがあること，学校行事，クラス参観などによる発言の場があることが考えられ，高等学校・大学の場合については，学校までの道程と各家庭が分散し，小・中学校に比べると発言の場がないためであろう．

伝達の方法としては，小学校，中学校については口頭が主で，高等学校，大学の場合は電話によるものが主であった．

現代の社会環境における学校教育と家庭教育のあり方，それらにスポーツ活動をいかに結びつけるか，ということが健全な国民生活を確保するのに大切な要素であることは言うまでもない．文明の進歩によって生じた運動不足という新しい現象は心臓病，高血圧，脳出血，糖尿病などを生じやすくしていることも明らかである．だが紛れもなく，スポーツを行なう場は学校体育施設が昭和55年現在で64.8%を占めているということが現状であり，しかも何らかの内容で学校体育施設付近に住む50%もの住民に迷惑をかけていることも事実なのである．以上のように複雑な状態にありながらも次のような意見がだされた．（回答文のまま）

◦健全な肉体に健全な精神が宿るとは真なり．

◦健全な国民を育成するにはスポーツが必要だ．

◦スポーツを行なって汗を流すことはすばらしいことだ．

◦体育施設，体育活動関係で迷惑をかけているとのことだが，あまり気にする必要はない．

などの内容である．また別項目で，1976年9月における予備調査（N＝327）で“子どもをどのように育てたいですか”の質問に対する回答は，健康な子93%．頭のいい子7%．“スポーツをやっている人についてどう思いますか”については，よいと思う92%，普通6%，よくない2%，という結果であった．自分の子どもは健康な子に育てたい，だが色々な面で体育施設，体育活動面についての不満を感じているという複雑な状態であった．

これらの問題を大きく3つの内容に分けてみた．

1. 学校の管理体制のあり方と充実．
2. スポーツを行なう者のモラルと指導者について．
3. 学校（スポーツを行なう者）と住民のコミュニケーション．

学校の管理面での充実については，徹底し解決しなければならないことは痛感している，ボールが飛んで行かないようにフェンスを高くする（新設校については6～8mのネットを張っている），グラウンドの土質について，ゴミ箱の設置，体育館の防音装置，など考慮しなければならない点があろうかと思うが，膨大な金額をかけ早急に施設・設備を整えるといっても無理があろうし，住民の不満は無くならないのではないだろうか．しかしボール関係での不満はフェンスを現状の高さに対し100cm程高くすることにより不満はかなり少なくなるだろう．また休日使用については，公立学校体育施設の開放状況を見ると（小・中・高等学校）屋外運動場を保有している学校の約74%に当たる約28,600校，学校別に開放率を見れば，小学校78.9%中学校72.5%，高等学校49.0%である．体育館を開放している学校は全体の約77%に当たる約24,800校，学校別に開放率を見れば，小学校81.5%，中学校82.0%，高等学校41.8%である．またプールについてては全体の40%に当たる約9,500校，小学校43.8%，中学校36.7%，高等学校16.6%である．開放頻度については屋外運動場の場合，一週当たりの開放日数は，2～3日開放している学校が全体の42%，4日以上開放している学校は33%である．体育館の場合，4日以上開放が全体の46%，2～3日開放は43%である．時間帯については開放校のうち，昼間及び夜間の区別なく開放している学校は，全体の10%に当たる約3,000校，昼間のみ開放して

いる学校は最も多く，全体の85%に当たる24,000校である．開放対象における屋外運動場の場合は，開放校のうち，開放施設を自校の児童・生徒の余暇活動のみに供することなく，広く地域住民の余暇活動に供している学校（一般開放校）は全体の約95%に当たる約27,300校である（昭和53年度），学校体育施設付近に住む住民は積極的に行動することによりスポーツを行なう場所はかなり確保できるのではなかろうか．高等学校での開放率がよくないのはクラブ活動によるものであり，私立の学校体育施設を開放している例はあまり見ない．

スポーツを行なう者のモラルと指導者については，体育施設の整備されていない日本の現状では，指導者に対する期待は大きくならざるを得ないであろうし，我々体育指導者が主になって毎日，現場での指導を重ねてゆかなければ増々状態が悪くなるのではなかろうか．体育の授業を行ないさらにクラブ活動における指導，さらに，となると限界なのだろうか．

生徒のクラブ活動に対する受け取り方，考え方が変わった点，またクラブ活動，体育活動の位置づけが各学校，地域，校長，あるいは教員間で統一されていないこともあろうが，成人期に決定的な影響を与え，感受性の強い少年期をより意義あるものにするためにも，身体活動を通しての教育は必要であろうし，生徒達も期待しているはずである．教師と生徒がともに考え，いかに行なうかということが大切ではなかろうか．

体育教師に対する批判の中に“授業よりもクラブ活動に力を注ぎ，全校生徒のための体育活動がおろそかになっている”といったものがあった．これはクラブ活動，研究的活動にかかわり成果の向上を求めようとするならば，そのようなことが生ずるのだろうか……．いずれにせよ指導者として悩み，迷うことの一つであろう．

限られた時間内での業務を遂行し，さらにクラブ活動を行なうことには誰しもその限界を感じているのであろう，このような立場におかれている指導者ではあるが，児童・生徒が自分の経験のみで事を判断するのではなく，思考させ，以前よりも価値のある行動を起こせるような指導方法と内容で自立できるように導いていくことが指導者の努めではなかろうか．

ボールが庭に入る．声がうるさい．登校・下校時に騒がしいなどは言い換えれば，やむを得ないことである，それよりも“すみません”“ありがとうございます”“よろしくお願いします”“おはようございます”といった言葉が児童・生徒の心から自然に出てくるような環境づくりが大切であり，事前・事後をいかに児童・生徒自身で行動するかということにより，住民の意識が変わってくるはずであり，そのようなコミュニケーションが必要ではなかろうか．クラブ活動の意義・目的を明確に児童・生徒・学生に理解させ，指導者は絶えず現状を把握し，現実に即した指導を行なうよう努力する，その辺に児童・生徒と指導者の役割と存在意義があり，住民との和ができて行くのではなかろうか．

参 考 文 献

(1) 富元国光：体育スポーツ関連施策2．経済企画庁．国民とコミュニティスポーツ．Vol 44 №12．46—48．新体育社（1974）

(2) 前川．江橋：体育科教育法．263—324（1968）

(3) 帝国地方行政学会：体育，スポーツ指導実施必携，647—648（1976）

(4) 豊田．遠藤：学校体育，第28巻．10号．62—66．日本体育社（1975）

(5) 射越栄一：学校体育，第28巻．1号．56—60．日本体育社（1975）

(6) 文部省体育局：我が国の体育・スポーツ施設，昭英産業KK（1981）

(7) 加藤橘夫：健康と体力，第78号．スポーツ指導者論．10—11（1975）